



Capsule No.2

ナガサキ・ユース代表团
10年誌

Nagasaki YOUTH DELEGATION

10th Anniversary
2013-2022



核兵器廃絶長崎連絡協議会会長
調 漸

ナガサキ・ユース代表団の 目指すもの

2012年10月にナガサキ・ユース代表団(NYD)は始動した。NYDは、長崎県、長崎市、長崎大学でつくる「核兵器廃絶長崎連絡協議会」が主催する次世代を担う若者の人材育成として、長崎県内の大学生等の若者を、NPT再検討会議をはじめとする国際会議等に派遣するプロジェクトである。ユースたちは核軍縮・不拡散外交の最前線で学び、世界各地の人々のネットワークを広げてきた。

NYDは1期生から現在までに78名(延べ94名)*の大学生らが参加した。

昨年アンケート調査によればそのOB/OGたちは4割が現在も平和や核軍縮の活動に関わっていると答え、将来はぜひ何か取り組みたいと答えたのは9割以上だった。卒後の進路としては教育とマスコミの関係が多く、平和と軍縮に関わる仕事としての選択なのかもしれない。2022年のウィーンでの第1回締約国会議会場取材陣の中にNYDのOB/OGが二人もいたことに鮮烈な驚きを感じたことは記憶に新しい。

NYDを経験したことで確実に世界観や生き方、職業選択にさまざまな意味でのステップアップを起しているように思われる。

次世代を担う若者たちが、核軍縮や平和の問題を実践的に学び、この分野で活躍する国内外の人々と出会い、意見をぶつけ、足元の平和と国際的な平和のあり方について考え、行動する力を身に付けつつあると思う。

最後に昨年のアンケートに寄せられた、あるメッセージを引用したい。

『ナガサキ・ユース代表団として活動できたことにより、自分の人生の可能性がより広がったと感じております。社会人になり、なかなか以前のように平和活動に取り組むことは難しいですが、昨今の核使用の危機も踏まえ、自分自身でも新たな方向からの核無き世界を目指してアプローチしていきたいと思っております。』

*第11期生を含む

核兵器廃絶長崎連絡協議会(PCU-NC)

核兵器廃絶長崎連絡協議会(PCU-NC)は2012年に、「長崎が核攻撃を受けた人類最後の都市に」と願う長崎県民、市民のため、長崎県、長崎市、長崎大学の三者が一体となって、核兵器廃絶に取り組むための枠組みを構築する目的で設立。一般会員の長崎県、長崎市、長崎大学に加え、長崎平和推進協会及び国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館も特別会員として参画しており、専門家による市民むけの講演会等の実施や情報発信、次世代を担う人材の育成、国内外の平和・軍縮研究機関等のネットワークの構築の支援などに取り組んでいる。

詳しくは右記をご参照下さい <https://www.pcu-nc.jp/>



RECNA センター長
吉田 文彦

未来は次世代がつくるもの

核兵器の問題に無関心を決め込むのは簡単だが、現実には誰も無関係ではられない。自分の人生がある瞬間、知らないところで押されたボタンの結果、想像もつかない形で暗転してしまうかも知れない。そんなリスクを抱えながらの「平和」であるにもかかわらず、日常生活は一見、平穏に続いていく。

核廃絶、核廃絶って言うけど、日本では核抑止があった方が安心という人が多いんじゃない？ナガサキ・ユース代表団のメンバーはそんな反応を経験したり、あるいは自分の中でそう考えたりしたことがあることだろう。しかし、今の少数派は将来の多数派になる可能性をもつ意見だ。今では当たり前の奴隷制廃止も、女性の参政権もかつては少数派だった。核廃絶もきっと同様だろう。

未来を開拓していく次世代の中に、胸を張って少数派を自負し続ける若者がいなくなったら、どれほど希望の持てない社会になってしまうことか。ナガサキ・ユース代表団のメンバーもOG・OBも、多数派にながされがちな世の中であって、「核のない未来」をつくる担い手であっていただきたい。人生100年時代に生きる次世代にとって、時間はたっぷりある。その間のできるだけ早い時期に、「核のない未来」を現実のものにできるよう、知恵をしぼってほしい。知恵は「再生可能な資源」だから、いくら活用しても尽きる心配などないから、自分なりのアプローチでチャレンジを続けていってもらいたい。

長崎大学核兵器廃絶研究センター (RECNA)

長崎大学核兵器廃絶研究センター (RECNA) は 2012 年に設立。核軍縮研究に特化した研究施設として、①国際社会で通用するような研究教育の拠点として、北東アジアの非核化や核抑止に依存しない安全保障の枠組み構築等に貢献できる調査研究や政策提言の作成、②専門性を持つ人材育成と幅広い視野と自主性を重視する若者の育成、③「市民のためのシンクタンク」としての情報発信を進めている。また、長崎大学刊行の“Journal for Peace and Nuclear Disarmament”の編集も担当している。

詳しくは右記をご参照ください <https://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/recna/>

What is the Nagasaki YOUT

ナガサキ・ユース代表団とは？

Q1. ナガサキ・ユース代表団って何？

A. 長崎県、長崎市、長崎大学の三者で構成する「核兵器廃絶長崎連絡協議会」(PCU-NC) が主催する人材育成プログラムです。2013年に第1期の活動が始まりました。次世代を担う長崎の若者が、核兵器や平和の問題を実践的に学び、この分野で活動する国内外の人々と出会うことで、自ら考え、行動する力を身に付けることを目指しています。被爆から77年が過ぎ、被爆者無き時代の到来を見据えての被爆地からの核兵器廃絶のための発信に貢献する若者が育つことを願ったプログラムです。

Q2. 誰が応募できるの？

A. 募集対象は、長崎県内に在住・在学・在勤の大学生・大学院生、および同程度の年齢の若者です(18～25歳を目安)。高校生(応募時)は不可。国籍は問いません。核兵器問題に関心があり、本プロジェクトの活動を通して、こうした分野での知識や経験を得たいと希望する若者、公式の活動期間(任命時から翌年8月31日まで)が終了した後も何らかの形で『核兵器のない世界』の実現のための活動にかかわっていく意欲のある若者を求めます。大学での学部や専攻等は問いませんが、日本語・英語での一定のコミュニケーション能力は必須です。また、活動に求められる知識を得るための勉強会や企画、準備のためのミーティングに原則すべて参加可能で、他のメンバーと協力してプログラムに積極的に参加する姿勢が求められます。

Q3. 費用は誰が負担するの？

A. 活動にかかる費用は、勉強会の開催や報告会の開催、報告書の作成等基本的に核兵器廃絶長崎連絡協議会が負担します。また、活動内容に海外での活動が含まれる場合は、渡航費および滞在費として一人当たり最大で20万円の補助金が支給されます。海外への渡航に際し20万円を超える部分は個人負担となります。

Q4. 誰がメンバーを選ぶの？

A. 選考は2段階で行われます。1次審査は志望動機などが書面審査されます。2次審査は日・英による面接です。長崎大学及びRECNAの教員だけでなく、他大学の教員・英語ネイティブスピーカー、長崎県、長崎市の担当者の参加も得て審査を行います。

Q5. 核問題を専門的に勉強していなくても大丈夫？

A. 大丈夫です。選考後の学習を通じて、核問題の基礎から最新情勢までを幅広く学ぶ機会があります。長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)の教員に加え元外交官や国連の軍縮担当者など学外の専門家を招いた講義やワークショップも開かれます。また、長崎の被爆の実相やその背景についても学習します。10期生の場合は、任期中に約30回の様々な勉強会と集中講義を受講しました。

H Delegation?

Q6. 具体的な行動内容は？

A. 大原則は『自分たちのプログラムは自分たちで創る』です。9期生はコロナウィルスの拡大による渡航制限やニューヨークでの核不拡散条約（NPT）再検討会議の延期により、当初の活動計画を大幅に変更することになりました。結果として主にインターネットを使っての様々な活動を展開しました。核軍縮と平和に関する国際的なセミナーやシンポジウム、ウェブ会議への参加、オンラインでの国際プレゼンテーションの主催、そして核軍縮の分野で活動している様々な人々との交流動画の配信などです。そうした活動はまた SNS を使って発信され、多くの人々に共有されます。参加者一人一人が自分の興味や関心、目標に沿って、オリジナルな活動プランを立てていく、というのがナガサキ・ユース代表団の活動の醍醐味と言えるでしょう。

Q7. 任期後の予定は？

A. 長崎県、長崎市、長崎市民及び一般市民の方々への活動と成果の報告を行い、8月末の任期満了を迎えた後は、「ナガサキ・ユース代表団」のメンバーとして活動する義務はありません。しかし、一人一人が自分の経験を活かし、何らかの形で核兵器の問題に関わっていくことが奨励されます。実際に、ナガサキ・ユース代表団のメンバーだった学生には、全国での平和教育の出前講義や講演、取材、また国際交流イベントへの参加などの依頼が多数舞い込みます。義務ではありませんが、核兵器廃絶長崎連絡協議会からそれらの依頼への協力を要望されることは珍しくありません、ま

た、核兵器廃絶長崎連絡協議会や RECNA が主催する核問題のセミナーやシンポジウム等、様々なイベントに参加することで、さらに知識や経験を積んでいくことも可能です。ナガサキ・ユース代表団での経験を踏まえて、大学院で核問題を専門に学ぶ道を選んだ人もいます。

MESSAGE

MESSAGE



長崎県知事
大石 賢吾

ナガサキ・ユース代表団の活動10周年を迎え、関係者の皆様のご尽力に敬意を表します。

これまでに87名の若い方々が、この活動を通じ、核兵器廃絶のために何をすべきか、そして自分自身に何ができるのかを考え、「知識を行動に結びつける力」を養うことができたことと存じます。

県内でも被爆者の高齢化が進み、被爆地の平和への思いを発信する若い方々の活動は、今後益々重要になってまいります。

ユース代表団の活動が、多くの人々の意識醸成につながり、長崎県民の願いである、核兵器廃絶と世界恒久平和が一日も早く実現されることを強く願っております。

MESSAGE

ナガサキ・ユース代表団 10 周年によせて



長崎市長
田上 富久

ナガサキ・ユース代表団が設立 10 年を迎えられ、大変嬉しく思います。

設立当初は国際会議の場で長崎市がお世話する場面もありましたが、今では手助けの必要もなく、自ら各国外交官と面会したり、海外の若者たちと関係を築いたり活動の幅を広げられており、とても頼もしく思っています。

また、長崎市との関わりでは、メンバーの中から長崎平和宣言の起草委員に就任してもらっており、若者目線の率直な意見は、今や平和宣言をつくる上で欠かせないものとなっています。

このように、大学生世代による平和活動が定着したことは長崎にとって大きな財産であり、未来へ繋がるベクトルが強くなったと感じています。

これからも平和をつくる大切な仲間として、更なる飛躍を期待しています。

MESSAGE

ナガサキ・ユース代表団 10 周年によせて



長崎大学学長
河野 茂

2012年にスタートした「ナガサキ・ユース代表団」も10期生が活動を完了し、11期生にバトンが渡される時期となりました。この10年間でNagasaki Youth Delegationの名は内外で次第に定着してきており、講演や意見交換の要望も多数にのぼります。「被爆者なき時代」が近づいてきている今、ナガサキ・ユース代表団の「次の10年」は、平和と核兵器廃絶の発信や行動を担ってくれる次世代の育成がこれまでも増して重要になる時期です。ナガサキ・ユース代表団が次世代のコアとなって被爆地のメッセージを国内外に広げていくため、学びや活動に一段と磨きがかかることを期待しています。

INDEX

ナガサキ・ユース代表団 1 期生	10
ナガサキ・ユース代表団 2 期生	11
ナガサキ・ユース代表団 3 期生	12
ナガサキ・ユース代表団 4 期生	13
ナガサキ・ユース代表団 5 期生	14
ナガサキ・ユース代表団 6 期生	16
ナガサキ・ユース代表団 7 期生	18
ナガサキ・ユース代表団 8 期生	20
ナガサキ・ユース代表団 9 期生	22
ナガサキ・ユース代表団 10 期生	24
座談会 Online	26

第1期生 2013年
NPT再検討会議
第2回準備委員会
スイス・ジュネーブ
国連欧州本部



第1期生メンバー（2013年4月当時、写真左から）

江島健一（長崎大学医学部医学科6年）、下田杏奈（長崎大学教育学部4年）、橋口優乃（長崎大学経済学部2年）、前川陽香（長崎大学経済学部3年）、胡芳欣（長崎大学大学院経済学研究科・中国山東大学大学院からの交換留学生）、斎藤佑布子（長崎大学事務補佐員）、大田祐一郎（長崎大学経済学部3年）、福田翔生（長崎大学経済学部2年）

ナガサキ・ユースから学んだこと

福田（旧姓：下田） 杏奈

ユース代表団の一員としての活動を終わってから早10年。私は今、地元・山口県に戻り県立高校の教員として働きながら、また2児の母として家事・育児と仕事の両立に慌ただしい毎日を送っています。

ユース代表団としての活動中は、自分の身近な問いや興味のある分野と社会問題である核に関する問題がつながり、また問いから学びが生まれ、さらに実践を通して問いを追究していくことができる面白さを実感し、まさに探究的な学びを多く経験させていただきました。

教員となってからは、社会科の教員がRECNAの核弾頭数データのポスターを持っていたことから、話が盛り上がり、社会科の授業でゲストティーチャーとしてNPT再検討会議を経験した話をしにいったこともありました。

現在は、在学中のような平和活動には縁が遠い状況ではありますが、時々、RECNAの先生方や仲間の顔を思い出して、あの頃に思いをはせています。いつかまた再会できる日を楽しみにしています。



第2期生 2014年
NPT再検討会議第3回
準備委員会
アメリカ・ニューヨーク
国連本部



第2期生メンバー（2014年4月当時、写真左から）

山中智絵（長崎大学薬学部2年）、橋口優乃（長崎大学経済学部3年）、新崎さくら（長崎大学教育学部2年）、
宮田美波（長崎大学医学部保健学科3年）、堀 真理子（長崎大学経済学部4年）、前川陽香（長崎大学経済学部4年）、
田平由布子（長崎大学経済学部4年）、西田千紗（長崎大学医学部医学科2年）

今のあなただからこそ、 「ユース」になれる。

田平 由布子

私はユース代表団2期生、駆け出しの頃のメンバーです。
当時は今ほどの知名度はありません。私達の活動や存在意義がなかなか伝わらなかった悔しさは数知れず。

しかし、真剣にやった分だけ人は見ているもの。私はドイツの学生たちと【核問題と原発】についての対話を企画しました。帰国後の報告会では長崎大学の大学院生が興味津々で私のところへ来てくれたことは、今でも忘れられません。

卒業後は縁あってRECNAのスタッフとして勤務。被爆体験の継承がご専門の研究者と出会い、私は継承活動を始めました。

現在は仕事と両立しながら、県内外で継承講話を実践中。学校などからは毎年のように指名で呼ばれるようになりました。また、核問題に無関心だった同僚たちが、自分の姿を通して興味を抱いてくれたことも嬉しいです。

混迷を極める世界で、今後ユースの役割や責任はますます大きくなるでしょう。ユースとして何をするか、そこでの学びをどう生かすかは、あなた次第。

真剣に取り組めば、きっと人生が変わりますよ。

ナガサキユース代表団 10周年に寄せて

西田 千紗

活動を通して、ユースの仲間達をはじめ、各国代表から同じ志を持つ他国の若者まで、本当に多くの貴重な出会いをいただきました。肩書きも年齢も様々であった分、核問題への姿勢も多様で、自分に無かった新たな視点に大きな刺激を受けました。また、これらの出会いを通し、自分の意見を伝えることにも大きな意義を見出せました。とりわけ、現地ニューヨークで発信したスピーチは、何事にも代え難い経験になりました。「本当に伝えたいことは何か」と悩み抜いたスピーチでしたが、スピーチ後は多くの笑顔に囲まれ、「何の肩書きもない若者であっても、相手へのリスペクトを持ち、精一杯の発信をすれば、対等に受け止めてもらえること、そして、その姿勢が“平和の種”となる絆を結んでいくこと」を実感した経験でした。

現在、救急集中治療医として、あの日のナガサキにも数多くおられた全身多発外傷や重傷熱傷の患者さんと向き合っています。各々の全身管理の難しさに、当時の医療従事者の方々のご苦勞を想像することがあります。きな臭いニュースが続く今、医療者として発信を続ける必要性を感じています。



第3期生 2015年 NPT
再検討会議
アメリカ・ニューヨーク
国連本部



第3期生メンバー（2015年4月当時、写真左から）

（前列）荒倉由佳（長崎大学医学部医学科3年）、中原ゆかり（長崎大学環境科学部3年）、山中智絵（長崎大学薬学部3年）、川崎真由（長崎大学薬学部3年）、宮田美波（長崎大学医学部保健学科3年）、竹田 讓（長崎大学多文化社会学部2年）

（後列）天野貴暢（長崎大学大学院工学研究科博士前期課程）、秀 総一郎（長崎大学多文化社会学部2年）、西田千紗（長崎大学医学部医学科3年）、稲垣歩海（長崎大学多文化社会学部2年）、佐々木朋哉（長崎大学工学部3年）、河野早杜（長崎大学環境科学部3年）

仕事に生きるユースの経験

竹田 讓

私はユースを通して「相手を知ること」の大切さを学びました。核兵器を巡る問題は、それぞれの国やNGOがそれぞれの歴史や考え方の下で異なる立場をとっています。交渉する相手、協力する相手のことを知り、そこにあるギャップを埋めていく作業がNPT再検討会議の場では行われていました。

現在の仕事とユースの活動に直接の繋がりはありませんが、様々な相手と交渉する業務に従事しています。仕事をすすめるうえでステークホルダーについて理解を深めて業務に当たり、上手く交渉することに繋がられているのは、国際会議での交渉を目の前で見てきた経験が活かしています。そして、そうした仕事で最終的に誰かの笑顔を創ることができると信じて、毎日の業務に取り組んでいます。

世界平和に直接大きく貢献することは難しくても、自分の仕事を通して作れる小さな平和は必ずあります。ユースOB・OGがさらに増え、小さな平和が輪を作り、世界平和が実現することを願っています。





第4期生メンバー（2016年4月当時、写真左から）

（前列）小泉 容（留学準備中）、工藤恭綺（長崎県立大学国際情報学部2年）、川崎有希（長崎大学教育学部4年）、
白波宏野（長崎大学多文化社会学部2年）、稲垣歩海（長崎大学多文化社会学部3年）

（後列）溝越史泰（長崎大学教育学部4年）、河野早杜（長崎大学環境科学部4年）、松本健太郎（長崎大学教育学部4年）、
秀 総一郎（長崎大学多文化社会学部3年）、佐々木朋哉（長崎大学工学部4年）

ユースのバトン

川崎 有希

私がユースを一言で表すならば、「出逢い」です。個性豊かで様々なバックグラウンドを持つ最高の仲間。私達の挑戦を全力で支えてくださる先生方。活動する中で増えていく知識。被爆体験と共に核兵器廃絶や平和に対する想いや願いを託すバトンを繋いでくださる被爆者の方々。仲間と共に「平和教育」というテーマにとことん向き合った、かけがえのない経験や出逢った人々。その過程で成長できた自分。4期生として活動できたことは私の人生の糧になっています。

小学校で働くようになり、原爆や核兵器、平和について知ることのできる機会を作り、子どもたちと一緒に考えていく、これが今の私にできる平和活動です。被爆者の方々からバトンを受け取った1人として、私にできることを続けていきます。

ある被爆者の方が「若者の活動は希望の光」とおっしゃってくださいました。今後も志を持つ若者が多く集い、核兵器廃絶という希望に向けて光を放ち続けていけますように。



第5期生
2017年 NPT再検討会議
第1回準備委員会
オーストリア・ウィーン
ウィーン国際センター



第5期生メンバー（2017年4月当時、写真左から）

北里友佳（長崎大学多文化社会学部3年）、一人置いて福井敦巳（長崎大学多文化社会学部2年）、片山桂維（長崎大学教育学部3年）、酒井環（長崎純心大学人文学部比較文化学科2年）、立石丞（長崎県立大学国際情報学部4年）、野村梨紗（長崎大学多文化社会学部2年）、西垣あすか（長崎大学医学部3年）、光岡華子（長崎大学教育学部4年）、山田ゆり（ゲストハウス勤務）

ユースの経験から学ぶ

立石 丞

ユース代表団に参加したのは、核軍縮への具体的な道筋について自分なりの考えを持ちたいからでした。

当時、私は平和公園のボランティアガイドを通し、原爆の実相に触れ、核兵器の非人道性を伝えていく活動をしていました。ところが、核軍縮の方法論について議論されないことには、核なき世界を実現できないとも感じていました。

そうして、参加したユース代表団ですが、国際会議の場で核抑止に対する各国の認識とその背景について発表させていただく機会をいただきました。そのなかで、私はとりまとめを担当していましたが、発表を聞いていたある大使から「現実を直視しなさい」といわれ、悔しい思いをしたことがありました。

そして同時に、私は核兵器に依存しない国際秩序の枠組みについて追求していくことの大切さを学びました。今このときも国際情勢がめまぐるしく変化していくなか、ますますこの視点は大切になってきていると感じております。このような考えに至ることができたのも、ナガサキ・ユース・代表団での経験があったからこそだと思っています。

ユースを振り返って

光岡 華子

新たを知る、見る、感じる、考える。この一連の機会はユース時代を通じて数多くあった。

それでも私の中で常に優先していたのはいかに「行動する」か。

なぜなら、“現状を知って衝撃を受ける”という経験は誰にでもできると思うから。

現状を変えたくても自分には何もできないという無力感を嘆くのではなく、自分にできることを実行していくことでしか自分を成長させる道はない、とユース時代の私は考えていた。だから帰国後、仲間達とたくさん行動した。

“現状を知って衝撃を受ける”という機会を他の人と共有し、同じ問いに向き合う機会を生み出した。

行動を重ねる度に悩み、私たちの考えは誤っているのではないかと成果の見えなさに不安になったこともある。ユースとしてのこれらの経験がどう将来役に立つのか？正直その答えは未だ持っていない。

“社会人”という型にはまると、途端に単調な時間が過ぎていくからだろうか。

ユースがその真逆の時間だったことは確かだ。あの熱と勢いが懐かしい。





忘れられないユースの思い出

片山 桂維

ナガサキ・ユース代表団は、長崎県・長崎市・長崎大学の3者で構成された核兵器廃絶長崎連絡協議会(PCU-NC)が主催する人材育成プロジェクトです。2013年に第1期生の活動が始まりました。毎年、長崎に集う若者が核兵器や平和の問題を実践的に学び、この分野で活躍する国内外の人々と出会うことで、自ら考え、行動する力を身に付けることを目指しています。

私は、第5期生として、ウィーンの国連事務所で開催された「2020年NPT再検討会議第1回準備委員会」への参加を中心に、広島研修や平和出前講座などさまざまな活動を行いました。中でも、アリ・ピーザー氏によるワークショップは、印象に強く残っています。活動を通して、被爆者の方から学んだことをどう伝えたらよいのか、経験していないことを語ってよいのかという迷いがありました。しかし、「誰もが語り手になれる。」というアリ氏の言葉に勇気ももらえたような気がしました。さまざまな人との出会いや繋がりをいただけたことに感謝しています。

ナガサキ・ユース代表団の十年

酒井 環

ユース代表団創設10周年、おめでとうございます。5、6期生として活動し、大学卒業後は長崎新聞社で記者をしています。ユースの経験が転機となり、この道に進みました。オーストリア、スイスで核拡散防止条約(NPT)再検討会議を傍聴。外交官と核政策について意見を交わし、一筋縄ではいかない核廃絶の難しさを目の当たりにしました。

印象深いのは、国連内の一室を借りて開いた自主ワークショップです。5期生では若者の平和活動の重要性などを発表。6期生では核兵器の非人道性を伝える短編動画を上映しました。核情勢の最前線で、ナガサキの若者の考えを伝えられたのは、大きな自信になりました。

記者となり、核兵器禁止条約第1回締約国会議は現地で取材しました。そこで感じたのは大胆に活動する「若者の力強さ」でした。露のウクライナ侵攻など、厳しい情勢が続いていますが、今後のユース代表団の活動も、廃絶に向けた後押しになると信じています。ユースのこれからのご活躍を心から応援しています。



第6期生
2018年 NPT再検討会議
第2回準備委員会
スイス・ジュネーブ
国連欧州本部



第6期生メンバー（2018年4月当時、写真左から）
（後列）三浦大輝（長崎大学環境科学部卒業、イギリス・サセックス大学留学準備中）、福井敦巳（長崎大学多文化社会学部3年）、永江早紀（長崎大学多文化社会学部3年）、孫 明悦（長崎県立大学大学院国際情報学専攻2年）、
（前列）酒井 環（長崎純心大学人文学部比較文化学科3年）、原田怜奈（長崎大学多文化社会学部3年）、工藤恭綺（長崎県立大学国際情報学部4年）、中島大樹（長崎大学多文化社会学部3年）

ユースで決めた進路

中島 大樹

ナガサキ・ユース代表団6期生・7期生を務めました中島大樹です。

僕は、学部時代の同代表団での活動に加え、大学院でも核軍縮・不拡散を専門として学んできました。同代表団での活動の概要として、大きくは2期を通じて、ジュネーブ及びニューヨークの国連を訪問し、NPT再検討会議準備委員会に出席しました。

その上で、印象に残っていることは大学院への進学を決意したことです。それは、6期生を務めた際にも大学院進学を1ミリも考えたことすらなかったためです。

では、なぜ大学院進学を志したのか。それはあまりにも核問題を表面的にしか理解していないと気付いたためです。良くも悪くも国内の学生の核問題への関わり方は感情論に依拠しており、本質的な理解に及んでいないという課題があるように僕は感じています。

今後のナガサキ・ユース代表団の活動を通じて、より多くの人々が核問題を本質的に理解し、国際的な課題の一つとして認識できるような取り組みができることを願っております。

留学生としての「ナガサキ・ユース」

孫 明悦

2017年11月19日17時、人生一番長かった「3時間」が経って、長崎ユース代表団の「合格通知」が来ました。この日から、私の留学生活が変わりました。

核兵器国である中国から来た私、なぜ長崎ユース代表団6期生に応募したかというと、核兵器廃絶は日本人だけのことではなく、地球に住んでいる人々のことだからです。核兵器が投下されたら、地球が終わります。

ユース代表団の活動で、6期生の皆さんはもちろん、他には先生たち、被爆者さんたち、専門家たちや日本人の学生たちなど、いろいろな交流ができて、今まで教育の差などの原因でお互いの「知らなかった」ことが知るようになりました。異なる角度から見ると考えるのは重要だと思います。

核兵器廃絶の先は長いと思います。核兵器を「平和のため」と言い続けているうちに、本当に核兵器廃絶ができるのでしょうか？被害者の目線だけで、本当に世界の人々の理解が得られて、核兵器廃絶にたどり着くのでしょうか？まだまだ困難がいっぱいあると思っています。しかし、世界平和のため、自分は今後も関心を持って、関わって行きたいと思っています！

若い世代が核兵器の問題にどんどん注目してくれるように～～





ユースは私の「宝物」

永江 早紀

この度は、ナガサキ・ユース代表団が10周年を迎えられましたこと、誠におめでとうございます。

私は6期と7期を務めさせていただきました。

現役時代を振り返ると、今では想像もできないほど忙しく目まぐるしい日々を送っていたことを一番に思い出します。その中でも、派遣中に計画したサイドイベントの準備で、他のメンバーたちと毎日ぶつかりながらも、自分たちの平和に対する思いと真正面から向き合った時間は、私にとってかけがえのない青春であり、大切な宝物となりました。

現在は、日本でさらにサステナビリティを実現するための事業を展開する会社で働いています。課題だらけの社会の中で、より広い意味での平和をテーマとした事業に携わっています。

専門的な知識はもちろんですが、ナガサキ・ユース代表団で経験した一つひとつの活動は、私の平和への気持ちをより深く、より分厚くしてくれました。

ぜひ、また今後10年、20年と、これからを担う若い人たちにとっても、「平和」を創造できる場所として、続いてほしいと強く願っています。

ナガサキ・ユース代表団の益々のご発展を、心よりお祈り申し上げます。

ユース時代の印象、学び、今後の活動への期待

三浦 大輝

私は、2020年に開催されたNPT再検討会議において、議場で各国のステイトメントが述べられる中、アメリカとロシアの間で、ステイトメントとは異なる論争が行われたことが強く印象に残っています。国際会議の傍聴自体初めてだったこともあり、立場が異なる国家間のリアルな緊張感を味わったように思いました。

また、諸外国の同世代の方と意見交換する機会があり、互いに核に対する認識や活動内容等について共有し合うことで、様々な発見があり、大変刺激になりました。

活動終了から現在に至るまで、日常で核に関して話す機会があった際、こうした経験や学びを踏まえた自身の考えを発信しています。

ユース代表団の活動は、国際会議のリアルな現状を肌で体感できるとともに、期間中様々な活動を通じて得られることが多くあると思います。これからもユース代表団の活動を通して、そうした経験をし、核について考えを発信できる人材が増えることを期待しています。



第7期生 2019年
NPT再検討会議第3回
準備委員会
アメリカ・ニューヨーク
国連本部



第7期生メンバー（2019年4月当時、写真左から）

内橋寛二（長崎大学多文化社会学部4年）、中山穂香（長崎大学歯学部2年）、何雲艶（長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科研究員）、高見すなお（長崎大学多文化社会学部2年）、牟田麗（長崎大学多文化社会学部2年）、厚田梨帆（長崎大学多文化社会学部3年）、永江早紀（長崎大学多文化社会学部4年）、矢野大輝（長崎大学工学部2年）、中島大樹（長崎大学多文化社会学部4年）

ナガサキ・ユースの思い出

何雲艶

私は第7期生の何雲艶です。2019年春、8人のメンバーと共に「2020年NPT再検討会議-第3回準備委員会」に参加しました。事前学習と現地調査を重ね、私たちは核兵器廃絶を訴えるため、「日本は世界唯一の戦争被爆国ではあるが、日本人は唯一の被爆国民ではない」という史実を再確認したのち、「ヒバクシャ」に新たな定義を付け、「サイドイベント」で発表しました。会場で各国の方から予想を超える反響をいただきました。

ニューヨーク滞在中、各国の政府やNGOの関係者、若者らとの意見交換を通じて、核を巡る最新の国際状況を把握し、視野を広げることができました。長崎に戻っては報告会を開き、高校生、大学生、市民の皆さんとの交流を行いました。その後も、それまでの活動を踏まえ、県内外に出前講座、交流学習会等の事後活動に取り組み、被害だけではなく、加害面も含め、歴史の全体的な学習の重要性を呼びかけてきました。

チームの中では最年長ではありましたが、言語を含めさまざまな面において周囲にお世話になりました。一年間を通した活動は私にとって貴重な思い出になっています。

ユースで学んだ「言葉」の大切さ

高見すなお

ユース時代で印象に残ったことは、国連の会議に参加したこと。右も左も分からないなりに自分たちで経験したことや行ってみたい場所、会ってみたい人、聞きたいこと等を出し合って、決まった日程の中でアポイントメントをとって実現させることができました。

ユースから学んだことは言語化の大切さです。心の中に何か考えや解決策が浮かんでいたとしても、それらが相手に伝わるように言語化できなければ、自分以外の視点や価値観を知ることさえも叶わないと実感しました。「何となく」考えていることを言語化する訓練を積めたことは非常に良い財産になりました。

現在の仕事や生活では、今は英会話事業の仕事をしています。自分が人の役に立てることで感謝される仕事をできていることに喜びを感じています。ユース時代に身に付いた行動力と言語化能力が活きていると感じています。現在は社会活動には関わっていませんが、今年中には寄付という形等を通して、何かしらの社会課題の解決の一部になろうと思っています。





核で平和は守れない!

矢野 大輝

「核兵器は必要だと思いますか?」ユースメンバーの一人が日本の政府関係者に質問した。しかし答えは賛否がはっきりせず、曖昧だった。

大学2年生の頃に参加したNPT会議で、ユースが会議傍聴とは別の時間に行った日本の政府関係者との対談の場での出来事だ。忙しい中で対談に応じてくれたことへの感謝がある一方で、対談では大事な部分が抜け落ちてしまっているかのような言葉が続いた。あの日から3年。唯一の戦争被爆国として世界から求められている日本の核廃絶への道筋は曖昧なまま、時間だけが過ぎてはいないだろうか。ウクライナの戦争では、ロシアが核兵器を使用する可能性が高まったとニュースを見た。これだけ核兵器の非人道性が世界中で強調される中で、戦争になれば「なんでもあり」がまかり通ってしまう。きっとこの先も戦争が起こるたびに、核兵器の脅威に怯え続けるのだろう。

戦争はダメ。核兵器はダメ。曖昧な言葉で平和は守れない。



第8期生 2020年
コロナ感染の拡大により
海外渡航は中止。



第8期生メンバー（2020年4月当時、写真左から）

（前列）岩高史織（長崎大学多文化社会学部3年）、高見すなお（長崎大学多文化社会学部3年）、箴島 葵（長崎大学環境科学部3年）

（後列）谷口萌乃香（長崎県立大学国際社会学部3年）、川村和輝（長崎大学大学院工学研究科1年）、中村 楓（長崎大学多文化社会学部2年）、三宅 凜（長崎大学多文化社会学部3年）

ユースで広がった視野

箴島 葵

私はこの活動を通し、人生の選択肢や社会について考えるための視野をぐっと広げることができました。

世界情勢が不安定な中、「どんな社会で生きたいか」「自分はどう生きるか」を考え、そこに向かって行動を選択することが求められると思います。

私は現在一般企業に勤めており、ユースで学んだ内容とは違う分野で仕事をしています。もちろん、プレゼンテーションスキルや正解のない問いを考える力、多様な考え方を受け入れる力など、活動で得られたスキルは存分に活かしています。しかし、平和を目指す活動やここでの学びを、いかに「仕事」に繋げられるかは、まだ自身でも課題であると感じています。必ずしも「仕事＝平和活動」を目指す必要はないのですが、一般企業に勤めていると、戦争や原爆の実相に目を向けて考える時間はぐっと減ります。

これからのユースには、先を行くカッコいい大人達との出会いを元に、仕事に繋がる活動の選択肢も広がること願っています。私も日々模索中ではありますが、世の中が納得のできる「生きたい社会」に向かうよう、これからもみなさんと考え続けていきたいと思っています。



ユースで成長を実感した私

川村 和輝

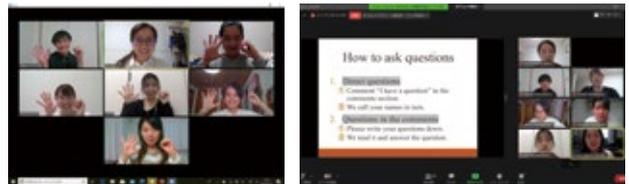
私はナガサキ・ユース代表団の活動を通し、人として大きく成長できたと思います。核兵器の問題は一筋縄ではいかず、世界情勢、環境、科学、権利など様々な問題と密接に関わり合っています。そのため核廃絶には正解がなく、国や地域、歴史的背景などによって考え方や思いが全く違います。こういった中でナガサキ・ユース代表団として世界中の方々と接することで、「平和とは何か」「自分が望む世界とは何か」を改めて考える良い機会になりました。また「正解のない問題」だからこそ、意見の異なる人に対してしっかりと耳を傾け、尊重し認め合うことの大切さを学ぶことができました。近年、戦争や核兵器禁止条約など世界情勢は大きく変わりつつあります。このような変革期だからこそ、今後のナガサキユース代表団には幅広い視点で学び感じたことから、ユースならではの核廃絶への回答を見つけ出してほしいと思っています。



大切な「想い」

中村 楓

私はナガサキ・ユース代表団を2期務めさせていただき、印象に残ることも学ぶことも多かった。まず、多角的に物事を考え実行に移すことの重要性を学ぶことができた。多角的に考えるということの重要性は多くの人が理解していると思うが、この考えを周囲に伝えていくといった行動に移すことはかなり難しいと感じた。ナガサキ・ユース代表団の仲間たちと話し合ったり、活動を通して出会った人たちと議論したりする中で、学ぶことができた。また、人の想いが不滅であるということだ。これは被爆者の方々とお会いする中で強く感じた。もちろん人の想いだけでは何も起こらないこともあるが、この想いがなければ平和活動は続かないし、彼らの経験を語り継ぐこともできないと思う。これから被爆者がいなくなる時代が到来するが、自分自身も彼らの想いを繋ぐために尽力したいし、次世代のナガサキ・ユース代表団にも期待したい。ナガサキ・ユース代表団での経験を活かし、これから様々な観点を視野に置きながら発信できる人間になっていきたい。



第9期生 2021年
コロナ感染の拡大により
海外渡航は中止。



第9期生メンバー（2021年4月当時、写真左から）

（前列）大園穂乃佳（長崎県立大学地域創造学部2年）、川尻ゆい（長崎大学大学院教育学研究科2年）、鈴木直緒（長崎県立大学経営学部4年）、中村 楓（長崎大学多文化社会学部3年）

（後列）有吉亜樹人（長崎大学医学部3年）、藤田裕佳（長崎大学多文化社会学部3年）、宮本 光（長崎外国語大学外国語学部3年）、村上文音（長崎大学多文化社会学部2年）、山口稔由（長崎大学多文化社会学部3年）

今後のユースに伝えたいこと、 期待していること

藤田 裕佳

私が今後のユースにお伝えしたいことは2つあります。1つ目は、「自信を持って活動に臨む」ことです。ユースとしての活動の中には、たくさんの人の前で発表したり、海外のイベントに出席したりすることもあります。NPT再検討会議ではサイドイベントを通して、海外の方々とディスカッションをする機会もあるでしょう。このような経験は責任が重大なので、もちろん緊張すると思います。でも、大丈夫です！伝えたい！という熱意と核兵器廃絶への想いを持っていれば、絶対にやりきることができます！自分たちの活動に誇りと自信を持って、任期を全うしてほしいと思います。また、核兵器の問題は複雑なので、中には私たちとは全く逆の意見を持っている人と対立したり、活動に対して心無い言葉をかけられたりするかもしれません。負けないでください！！「私たちが声を挙げなかったら、誰が声をあげるんだ」という思いを胸に、日本・世界へと活動を広げていってほしいです。

2つ目は、どのような形であれ、これからずっと核軍縮問題と関わってほしい、ということです。任期が終了したり卒業したりしてしまうと、自然と平和活動から遠ざかってしまうこともあるでしょう。しかし、積極的な活動家であることだけが唯一の平和活動ではないと思います。新聞やニュースで核軍縮問題に注視する、核兵器問題について話題にあげてみる、平和や原爆について自然と子供と話せるような親になる。さまざまなレベルでの平和活動ができるのではないかと考えていますし、私も何らかの形で核兵器廃絶運動に携わっていきたいと思っています。

これからのユースの活動に期待しています。頑張ってください！

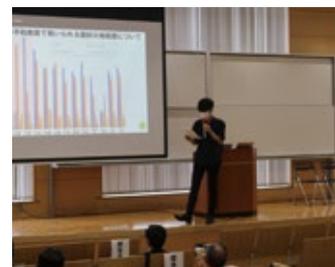
ユースは私の財産

村上 文音

「ナガサキユース代表団」。ずしりと重い肩書を背負った経験は、私の人生を大きく変えてくれました。週2回のMTGやイベントの主催、約30回にわたる勉強会や出前講座の提供、研修旅行など。目の回るような忙しさだったことを覚えています。

活動を通して、本当にたくさんの出会いがありました。国連で活躍する職員の方。国内外で平和を訴え続ける被爆者の方。応援してくださる市民の方。一緒に頑張ろうと言ってくれた同世代の方。いつも支えてくれるRECNAの先生方。すべての出会いは感動であり、最大の財産です。交わした名刺の数が日に日に分厚くなっていくのを見ては、心がじんわり、温かくなるのを感じます。

一筋縄ではいかない核兵器問題。これに立ち向かうことはそう簡単ではありません。しかし、同じように悩み、葛藤を抱えながらも尽力し続ける仲間がいます。強く、そしてたくましく。真剣に悩んで、手を取り合い、諦めずに行動する。他にはない経験を、任期を通じて得ることができました。





引き継がれる願い

山口 稔由

この原稿の執筆途中で、私がユースを務めていた時、RECNAでお話をお聞きした被爆者の方が、お亡くなりになりました。核兵器のことや平和のことを、任期中に考えることは当然のことかと思うのですが、任期を終えてしまうと、どうしても優先順位が下がってしまったり、平和活動から離れてしまったりする人が多いと思います。しかし私は、ユースの活動が終わったから終わり、ではなく、これからも考え続け、仲間と繋がってほしいな、と思います。ユースの活動を通して、私たちの世代にも、もっと若い世代にも、核なき世界へ考え、行動している人たちがたくさんいるのだと実感しました。私たちの世代は、被爆者の方の話を直接聞き、これからの代に繋げることができる、大事な存在だと思います。ユースで学んだこと、感じたことを、これからも活かして行ってほしいなと思います。これからは私たち、あなたたちが引き継いでいく番です。

数多くの思考モジュールを養う

鈴木 直緒

私は第9期生として、多くの思考モジュールを学びました。要因は2つです。1つ目は、チームワークです。例えば、定例中にKJ法を用いてチーム内の意見を整理した上、研修で知識を深めました。それにより自分の思考の傾向を知り、伝え方を錯誤しました。これらワークは、思考をブラッシュアップする貴重な経験になりました。2つ目は、発信の機会に恵まれたことです。特に任期中はTPNWが発効し、また東日本大震災10年の節目の年でした。第9期生という立場を利用し、自分の考えに対して双方向から意見を得ることが出来ました。さらに、オンライン普及の恩恵で多様な国外団体と定期的に議論する機会も得ました。この経験を通して、私はよりクリティカルな視点から良い意味で思考を反芻し、時代背景など広い視野を養いました。この過程は、今でも礎として生きています。RECNA/ナガサキ・ユース代表団創設10周年、誠におめでとうございます。



ナガサキ・ユース
代表団

10
期生

第10期生 2022年
NPT再検討会議
アメリカ・ニューヨーク
国連本部



第10期生メンバー（2022年4月当時、写真左から）

（前列）宮崎優依（長崎大学経済学部2年）、小松原優光（長崎大学多文化社会学部2年）、福永 楓（長崎大学大学院多文化社会学研究科1年）

（後列）猪原彩美（長崎大学多文化社会学部2年）、野尻稀海（長崎大学多文化社会学部2年）、姜 妙京（長崎大学多文化社会学部2年）、後藤歩夏（長崎大学多文化社会学部2年）

相反する二つの思い

後藤 歩夏

私はユースとして活動をして、核兵器廃絶ということに対して絶望感、期待感の両方を抱きました。核兵器廃絶に向けて何ができるのか必死に考えてもその度に厳しい現実的な話とその考えを真っ白にしてしまうということを何度も経験しました。実際に核兵器を世界からなくすというのは非常に困難なことです。しかし多くの絶望を味わったはずなのに私はまだいつか実現できるはずだと信じています。それは核兵器廃絶に向けて一生懸命活動をしている多くの人々と出会ったからです。彼らの姿を目の当たりにしていつかこの声が世界のリーダーたちに届く日が来るはずだと考えるようになりました。ユースをきっかけにして彼らの仲間に加わることができたのはユースで得た大きな財産です。今後のユースにはナガサキ・ユース代表団の一員として長崎という地から世界に向けて平和を訴えることは非常に大きな使命であるということをしっかり受け止め、様々な人と一緒に活動の場を広げていってほしいと思います。

仲間が支える活動

姜 妙京

私はユース10期生として他の6名のメンバーと共に約1年間の活動を行ってきました。活動が後半になっていくにつれて、出前講座など私たちが教える機会も増えたのですが、私個人の感想としては初めから最後まで学ぶこと・吸収することの多い期間でした。10期生の活動期間中にロシア・ウクライナの情勢が悪化し、ユースの活動外でも日常的に核兵器問題に関する情報を目にするようになり、私たちの活動の意義についてメンバーと話し合うことも多くありました。しかし、私だけでは堂々巡りしていた考えを周りに共有することで、話題を発展させて活動に繋げていくことができました。ユースの強みは、同じ年代の人たちと真剣に世界の情勢について話し合うことができる点です。様々な情報を取り込みながら自分の考えを形にする経験を重ねて、全体の活動に繋げることで有意義な時間を過ごしていってほしいと思います。





これからも続く活動

猪原 彩美

私は、ナガサキ・ユース代表団の10期生として活動しました。専門家の方を講師としてお招きし、20回以上の勉強会を実施するほか、小・中・高校生への出前講座等も行い、8月にはニューヨークで開催されたNPT再検討会議に参加をしました。任期期間中、ウクライナ軍事侵攻が起り、自分の無力さを痛感しましたが、それと同時に「核抑止論は通用しない、今こそ核兵器廃絶の声を上げなければならない」という気持ちが強くなったのも事実です。また、国連での会議傍聴やプレゼンテーション、各国大使との対談等を通して、核兵器を取り巻く世界情勢の複雑さも実感することができました。核兵器の問題は過去の話・被爆地だけの話ではありませんし、今を生きるすべての人々がいつでもヒバクシャになりえます。未来のために今何をすべきなのか、一人一人が考え、行動しなければなりません。私も、10期生としての任期は終了しましたが、これからも核兵器廃絶に向けて声を上げ続けます。

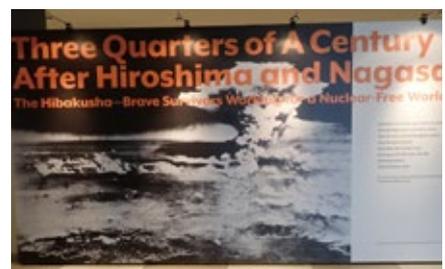
10期生としての1年

野尻 稀海

新型コロナウイルスの感染拡大が収まらない中、10期生は運良くNPT再検討会議傍聴のためニューヨークに渡航することができました。そこで各国の大使や軍縮関係者と話をした際に実感したのは、被爆者の想いと世界の間には大きな隔りがあるということです。それと同時に、核問題というあまりにも複雑で大きなスケールの問題を考えるにあたり、自分の無力さを感じて活動していることの意味を見失いそうにもなりました。それでも世界の大使の方々がわざわざ時間を割いてお会いしてくださったのは、私たちの存在に何か意味を見出されたからだと思います。

私にできることは、被爆者の思いを絶やさず後世へ伝えることだと感じています。県内外の中学校や高校への出前授業は、それを最も実感することができるありがたい機会でした。

ナガサキ・ユース代表団の10期生として活動した1年はとても濃いものでした。これからどのような道に進んでも、この経験は一生の糧になると思います。



座談会

Online

ナガサキ・ユース代表団10年誌座談会（2023年2月）

秀総一郎（3・4期） テレビ局勤務

光岡華子（5期） 一般企業勤務

藤田裕佳（9期） 長崎大学多文化社会学部4年

村上文音（9期） 長崎大学多文化社会学部3年

広瀬 訓（RECNA 副センター長）



藤田裕佳

藤田：今日の座談会のコーディネーターを務めさせていただく藤田です。今日はナガサキ・ユース代表団10周年の節目に、OB・OGの方に話を伺いたいと思っています。懐かしい話もありますが、テーマとしては「未来志向」ということで、これからのナガサキ・ユース代表団の在り方について、ご意見等を頂ければと思います。まずは私のことですが、ナガサキ・ユース代表団9期生として活動し、この4月からは大学院へ進学し、核軍縮や平和の問題についてより深く学ぶ予定にしています。私と村上さんはまだ学生ですが、社会人の方々にとって、核兵器や平和の問題に触れる機会とか、ありますか？

秀：そうですね、私はテレビ局で記者をしていますので、仕事のうで日常的に接していると言えば、そうなります。今だと、やはりウクライナ情勢は注視しています。私は現在経済を担当しているので、ロシアの動向は重要です。しかし、仕事を離れると、そういう話をするのはほとんどないですね。仕事以外で平和や核兵器に関心を持っている人は、まず周囲にいません。そういう意識の差はいつも感じますね。

光岡：私は一般企業に勤めているので、核兵器や平和について話題にすることはまったくありません。私のところは店舗もありますが、店舗に居たら核兵器の話なんてできるはずがない。むしろ会社の中では、社員の間に余計な溝を作りかねないということで、政治と宗教のことは話してはいけないという暗黙の了解があるようにも感じます。同期の中には、職場では選挙の話すらタブーだと考えている人もいました。それが現実です。

村上：それは学生にもあります。私の周りには核兵器や平和の問題に関心のある学生が比較的多いので、そういう学生とは話ができますが、関心のない学生はまったく関心がありません。そのギャップはとても大きいと感じています。

藤田：私たちの所属している長崎大学の多文化社会学部は元々国際的なことに興味、関心のある学生が多いので、話をする機会もありますが、国際的なことに特に関心を持っていない学生と話をする機会のはたしかに無いですね。

秀：ナガサキ・ユース代表団で活動していたような人は、そもそも核兵器や平和の問題に関心がある人たちなので、あまり関心のない人たちにわかってもらうためには、



秀総一郎

より丁寧に話をしなくちゃならない。

村上：特に長崎だと、被爆地なので、「核兵器廃絶のために活動しています」と言うと、いろんな人が「凄いね」って言ってくれます。しかし、私はそれにちょっと違和感を感じています。核兵器の問題はみんなの問題じゃないのか、どうして「自分もやろう」とならないのかなと思います。

藤田：核兵器の問題に危機感を持つ人は「凄い人」なのかって、それは違うと私も思います。みんな自分の問題として関心を持って欲しいと思います。それでは誰もが気軽に核兵器の問題に取り組めるようにするためにはどうしたらいいのか、その方法を考えなくてはならない。

光岡：最近あちこちで「エシカル消費」という言葉を聞くようになり、企業も意識しています。「エシカル消費」というのは、環境や作る人、使う人のことを意識して、社会や環境に優しい商品を選んで購入しようとする動きです。それでリサイクルされた原材料で作った商品や、環境負荷の小さい商品が売れるようになると同時に、消費者の意識も変わる。しかし、核兵器について考えると、こういうアプローチは困難です。核兵器をリサイクルなんてできない。核兵器の問題を「自分の問題」として具体的にイメージできるような方法はなかなか見つからない。自分の問題として考えようすると、問題がぼやけてしまう。

藤田：たしかに「それでは核兵器を無くすために、私には何ができますか？」と訊かれると答えに詰まってしまう。小中学生なんかを対象とする平和講座だと、「まずは核兵器の問題についてしっかり勉強して、知ることです。そして関心を持つことです。」と答えています。果たしてそれだけでいいのか。それだけでは核兵器は減らない。核兵器の製造・開発に融資している金融機関に口座を作らないようにしようというキャンペーンを進めている国際 NGO があるが、もう少し具体的に「できること」があると他の人にも話をしやすい。

秀：ナガサキ・ユース代表団の学生に何ができるかといえば、私はむしろ地元での活動が重要ではないかと考えるようになった。たしかに海外での活動も重要ですが、長崎での活動、日本国内での活動が重要で、それを充実させる必要があるのではないと思う。国内でナガサキ・ユース代表団の活動が活発になれば、マスコミも注目するはず。「長崎の学生達が核兵器廃絶へ向けて頑張っている」というメッセージを発信するのはとても重要だと思う。

藤田：なるほど、「被爆地の若者」というキーワードで訴えるわけですね。

秀：そして、ナガサキ・ユース代表団発の、核兵器廃絶へ向けてのネットワークを広げるためには、ナガサキ・ユース代表団の OB・OG をもっと活用すれば良い。現在のところ、各期のメンバー同士は結構つながっているみたいですが、残念ながら縦のつながりは乏しい。私は 3・4 期ですが、7 期、8 期以降になるとほとんど知らない。村上さんとは今回は初対面です。もう 10 年になるんだから、このあたりでしっかりユース同窓会を作ったらよいと思う。一度みんなで顔を合わせる機会を作れば、そこからネットワークも広がっていくと思う。

光岡：そう、私もそう思う。せっかく先輩たちがいろいろな経験を積み重ねてきているんだから、それを活かさないのはもったいない。

秀：初期のナガサキ・ユース代表団の活動のことについては、どのくらい伝わっているんですか？

村上：私の場合、高校生の時から平和学習部などで活動していたので、ナガサキ・ユース代表団のことは良く知っており、あこがれていました。長崎大学を進学先に選んだのも、ナガサキ・ユース代表団に入りたかったからというのが主な理由です。しかし、私の場合はむしろ例外で、長崎大学の学生でもナガサキ・ユース代表団のこと



村上文音



光岡華子

はそこまで知られているわけではないと思います。



光岡：私もナガサキ・ユース代表団のことは知らなかった。もう少し学内でも知名度を上げる必要があると思います。それからナガサキ・ユース代表団に選ばれるのは大変だというイメージが広がっているのは問題だと思う。実際に英語のレベルがどんどん上がっており、普通の学生では手が届かないという印象が強い。ナガサキ・ユース代表団の活動はまず英語が優先ではない。語学力よりも、核兵器廃絶にかける思いとか、情熱がより重要だと思う。そういう思いを持った人が英語力でナガサキ・ユース代表団を諦めているとしたらとても残念。例えば、英語が堪能なメンバーと、必ずしもそうではないメンバーを二人一組にしてフォローするような体制にすれば、英語が苦手でも活動に支障はないと思う。メンバー全員に高い英語力を要求する必要はないし、そうすることで、もっと多様なメンバーを集めることもできると思います。もっと核兵器に関心を持つ人のコミュニティを広げるような工夫が必要でしょう。

秀：私も活動に対する熱意が何よりも重要だと思います。英語は海外派遣までの間に努力すれば最低限のことは何とかできると思います。それから、ナガサキ・ユース代表団は、小中高の平和学習や出前講座にはよく行きますが、他の大学へ行って講座をすることは無いですね。県内の他の大学からの参加者を増やすためには、小中高だけでなく、大学へも出前講座に行ったらよいと思います。

藤田：私は特に学内でのナガサキ・ユース代表団の知名度を上げるために、授業で一コマぐらい、ナガサキ・ユース代表団が担当しても良いと思います。教養教育の一環として、長崎大学の全学生に核軍縮について学ぶような科目を入れてもらって、そこでナガサキ・ユース代表団のメンバーが話をするようなことはできないのかなと思います。

広瀬：教養科目で必修になっている「長崎地域学」には核兵器について学ぶコマがありますが、基本的には被爆者の方の特別講義を聞くことになっているみたいです。時々RECNAの教員が担当することもあります。ほとんどは特別講師として被爆者の方に依頼しています。あとは教養の選択科目になりますね。

光岡：教養科目の「核兵器のない世界を目指して」ですが、あの科目は人気があるので、だいたい履修希望者の中から抽選で選ばれた学生しか履修できないですね。

村上：核軍縮や平和に関する授業を履修するというのは、ナガサキ・ユース代表団に関心を持ってもらう良いきっかけになると思います。授業で学ぶというのは、核軍縮や平和についての活動の入り口になるし、ハードルを下げるのに役立ちます。

秀：率直に言って、私の場合、せっかく長崎に来たのだから、何か長崎らしいことをやってみたいという気持ちでした。そしてナガサキ・ユース代表団に入れば「国連に行ける」というのが大きかったです。最初はそこまで核兵器廃絶を意識していたわけじゃないです。普通の学生が国連に行ける機会なんて、なかなかないじゃないですか、やっぱりそれは魅力でしたよ。結果として、海外で活動を通していろいろと考えることもあって記者になろうと決めました。ナガサキ・ユース代表団での活動を通して、自分がいぶん変わったと思うし、素晴らしい経験ができたと思います。核兵器廃絶だけでなく、ナガサキ・ユース代表団の活動は、人間として学ぶところも多いと思います。きっかけは何でも良いと思います。

藤田：たしかにナガサキ・ユース代表団では本当に様々な経験ができましたし、自分でも変わったと思います。しかし、ナガサキ・ユース代表団のことを知らない学生も多いですし、核兵器について、まったく違った考え方を持っている人もいますよね。そういう人にはどう伝えたらよいと思いますか？

秀：丁寧に話をするしかないですね。それから、興味、関心を惹くように発信すること



が重要です。やっぱり積極的にSNSを活用するのが大切だと思います。ネットを上手に使うのは不可欠です。ネットを使えば、卒業して長崎を離れたOB・OGともつながりを持つことができます。そうすればいろいろと助言ももらえるし、サポートしてもらえるとと思います。ちなみに藤田さんはナガサキ・ユース代表団での経験を将来どのように活かそうと考えていますか？

藤田：大学院でも核軍縮を学ぶ予定なので、社会人でも何かしらの平和活動に携われたら…とは思っていますが、実際に社会人になってみないと分からないので具体的に考えられていないのが現状です。しかし、将来結婚し子どもができれば、子どもたちに自然に平和や核兵器の話ができるような親になりたいですね。

秀：それは素晴らしい。正直に言って、就職してしまうと、毎日目の前にある仕事と家族のことで精一杯で、平和や核軍縮のことなんてなかなか考えている余裕がない。それでもナガサキ・ユース代表団で学んだこと、経験したことを忘れないで、どこかで時々思い出すことがとても大切だと思います。私も毎日仕事に追われていますが、それでも時々ナガサキ・ユース代表団のSNSは見ています。それでまだ「つながっている」と感じるんです。

光岡：やっぱり社会人になると毎日の生活で手一杯で、社会に目を向けている余裕なんてないです。働き始めて、学生時代がどれだけ恵まれていたかと、つくづく感じています。社会人よりも学生の方がずっとよく社会を見ているし、考えていますよ。社会人の圧倒多数は、「ウクライナは大変だ」とか言いながらも、平和についてはまったく考えていませんよ。皮肉な言い方になりますが、日本が平和だから、あえて平和について関心をもちたくとも問題なく生きていけるんです。そんな多くの人が気にもしていない裏側で何が起きているのか、それを考えるのが重要なはずなのですが、それが思う存分できるのが学生の特権です。

秀：そうそう、私もそう思います。本当に学生時代というのは、恵まれた時代なんですよ。学生はそれを活かさなくちゃもったいないです。それは絶対にこれからのナガサキ・ユース代表団のメンバーに伝えておきたい。

光岡：やっぱりOB・OGでもう少ししっかりネットワーク作って、そういうことを後輩たちに伝えなくちゃいけないですね。ナガサキ・ユース代表団同窓会を作る必要がありますね。

一同：賛成、同窓会やりましょう！



編集後記

今回この10年誌を編集するにあたり、できるだけナガサキ・ユース代表団各期のメンバーに原稿を依頼しようとして、連絡をとり、近況を聞くこともできました。学生時代と違い、一度社会に出ると、なかなか自分の思うように活動することができないという葛藤を抱えているOB・OGの声もあります。しかし、「葛藤」があるということは、「何かしなければ」という気持ちを失っていないということです。それが本当に頼もしく感じました。その気持ちを持ち続けている限り、いつか、何かの形でそれぞれの経験と気持ちを活かす機会が訪れると思います。それまでナガサキ・ユース代表団のスピリットが一人一人の心の中にしっかりと根を下ろしていくことを信じています。

また、Capsule No.2の編集にあたり、様々な協力を申し出てくれたナガサキ・ユース代表団のOB・OGの方々、特に矢野大輝(7期)、中村楓(8・9期)、藤田裕佳(9期)の3名と、核兵器廃絶長崎連絡協議会事務の池田克子さん、平下大樹さんには心から御礼を申し上げます。

(広瀬 訓)

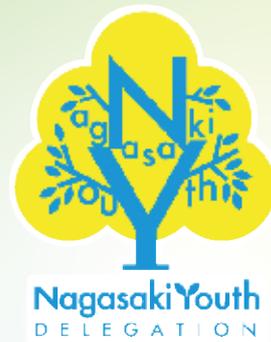
※CAPSULEという冊子の名前は、「アイデアの詰まった箱」をイメージして付けました。

新しいアイデアは急に生まれるものではなく、別のアイデアを組み合わせたり一部を変えたりして生まれるものだと思っています。みんなのアイデアや想いを詰めたこの冊子CAPSULEが、これからユースに挑戦してみよう、というみなさんの(選考や活動)のヒントとなれば幸いです。

実はこの冊子をつくるにあたって、一つ野望がありました。5年後、10年後、vol.2,3...とこの冊子が増えて、「タイムカプセル」のような、将来のユースメンバーが過去の活動を振り返ることができる「若者の平和活動アイデア集」になれば、と。私一人では叶わない夢ですが。5年後、ボタンを受け取ってくれる「誰か」がいますように…。(中原ゆかり、3期生、CAPSULE No.1より)

Capsule No.1は下記からダウンロードすることができます

https://nagasaki-u.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=3785&item_no=1&page_id=13&block_id=21



核兵器廃絶
長崎連絡協議会
PCU-Nagasaki Council